ぐに呼ぶと註せり、卽今キクといふもの此也、其註せし所の如きは、古にはカハラヨモギとも、カハラオハギとも云ひしを、後の俗、字の音によりて、キクといひし也、されど歌の言葉などには皆キクとのみ讀みたれば、古言の俗なる、後の代の雅言とはなれるなり、かゝる例少からず、（中略）古の時には、菊の字を讀でク、といひけり、舊事記にク、リヒメといふ神の名を、菊理媛としるされ、和名抄にク、チといふ地の名の、菊池と見えし如き是也、されば和名抄には、當時の音によりて、キクといふをもて、本音とは云ひしなり、カハラとは川上をいふなり、ヨモギといひ、オハギといふが如きは、艾蘥の類なるをいふなり、白蒿一にカハラヨモギといひぬれど、此物には異なり、

〔倭訓栞前編七〕きく（略中）　菊はもとくゝとよめり、菊理姫菊池郡など是也、新撰字鏡、和名抄に、和名をも載たれど、歌には音をもてよめり、（略中）菊花の弟と稱するは、梅を花の兄と稱するに對へていふ也、菊は万花に後るゝものゆゑに、わけて殘花をも賞するなり、殘菊の名は、東坡詩に本けり、重陽を過ての名なるよし、菅家文草に見えたり、殘菊宴は十月五日に行はる、村上帝の時に始まる、西宮記に見ゆ、（略中）ひともとぎくは、新勅撰集物名に見えたり、續後撰に、一本菊奉るとも見えたれば別種にや、蝦夷には、春白花の菊ありといへり、菊花種類多しといへど、單瓣、重瓣、有心、無心、旋心、佛頭、蜂窠の七品をもて總る也といへり、近年一株にて、五色を備るあるに至る、（略中）歌に山路の菊などいへるは、本草にいへる苦薏なべし、群芳譜にも、菊與薏有兩種と見えたり、苦薏一名野菊にして、倭にのぎくと稱するは、馬蘭一名紫菊なり、嫩葉をよめなといへり、源氏に老をわするゝ菊といひ、齡を延ぶる事を歌によめるは、風俗通に見えたる南陽の甘谷の事によれり、仙書に延壽客といふよし、月令廣義に見えたり、菊の下水などもよめり、本草に据ば、南陽の菊黃白兩種あり、蒙筌に、月令獨于菊曰黃花、取其得時之正、況當其候、田野山側盛開、滿眼皆黃花也と見ゆ、我邦山野自生の者は、皆白花なるを異とす、

〔假名世說〕平維章（姓は平、名は維章、字は子文、金吾と稱す）云、菊に和訓なきは、遲く此國へ渡りし故、和訓の詮議もなき事、實にさも有るべし、（略中）足利將軍開國の比、東福寺の聖一國師、陶元亮が詩をよまれしに、採菊